

松尾芭蕉の研究

— 旅を中心にして —

原 田 正 美

目次

はじめに

第一章 芭蕉について

第一節 芭蕉の生いたち

第二節 旅へのあこがれ

第二章 芭蕉の旅

第一節 『野ざらし紀行』の旅

第二節 『鹿島紀行』の旅

第三節 『笈の小文』の旅

第四節 『更科紀行』の旅

第五節 『おくのほそ道』の旅

第三章 芭蕉にとって旅とは何であったか

おわりに

はじめに

私が、はじめて松尾芭蕉の作品に出合ったのは中学校の頃であった。授業を通して『おくのほそ道』を講読した時は、松尾芭蕉とい

う人は、歌枕の多い陸奥を旅して俳句を詠み、その過程を『おくのほそ道』という紀行文として残した人なのだ、という感覚でしかなく、ただ「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」という冒頭文が印象的であると思っただけであった。

しかし、短大に入って、芭蕉の作品と触れる機会があり、『おくのほそ道』を詳しく見ていき、芭蕉という人物を知ることによって、芭蕉が軽い気持ちで旅へ出たのではないということ、芭蕉の旅が、我々一般人の旅とは、まったく違うものであるということがわかった。そこで、旅人としての芭蕉に大変興味を持ったのである。

よって、この研究では、芭蕉を旅へ出ようと思わせた背景は何であったか。またその旅はどのようなものであったかを考察していきたい。そして、芭蕉にとって旅とは何であったか、私なりに考えてみたいと思う。

第一章 芭蕉について

第一節 芭蕉の生いたち

芭蕉が生まれてから旅に出るまで、彼はどのような人生を歩んできたのであろうか。これから旅人としての芭蕉をみていくにあたって、まず彼の生いたちについて知る必要があるであろう。そこで、旅に出発するまでの芭蕉についてふり返ってみたいと思う。

芭蕉は、伊賀の上野に松尾与左衛門を父として生まれた。父は郷士であったが、松尾家は天正九年織田信長の徹底的な焼土侵攻作戦の結果、他の伊賀の地侍らとともに殲滅されてしまい、わずかにのがれて土民化した者の子孫の一部が近世の藩政時代に入り、藤堂家の融和懐柔策のもとで、無足人の制（無足とは俸禄の給付のないこと。無足人とは「村里有名の家」で描字・帯刀を許され准士分として待遇されたものをいう）に組み入れられることになる。芭蕉の家がこうした無足人級の在地土豪の一から出たものであることは、ほぼ疑いないであろう。

芭蕉は幼名を金作といい、藤堂新七郎家の当主である良精の三男、藤堂主計良忠に仕えた。藤堂新七郎家は、藩主藤堂家の血をひいているが、城代の家ではなく侍大将の家で、当主の良精は五千石を給せられる程度の家であった。芭蕉が仕えていた良忠は芭蕉より二歳年長で、嫡子として家を嗣ぐことになっていた。この良忠は、当時の学者であり俳人でもあった北村季吟に師事し、俳諧を学び蟬吟と号した。季吟は貞門派の俳人であったので、良忠も芭蕉（当時

への執心を深めていった。そして芭蕉が俳諧一筋の人生をたどることになったのは、この蟬吟との出会いにあったといっても過言ではなく、大きな影響を受けたことはまちがいないだろう。しかし、芭蕉を愛してくれた蟬吟は、寛文六年（一六六六）芭蕉二十三歳のときに亡くなってしまふ。この蟬吟の死は、芭蕉に大きな衝撃を与え、彼はまもなく亡命してしまふことにもなり、俳諧のつながらりと漂泊者としての運命を決定的なものにした。

その後、芭蕉は藤堂家を去り、新しい人生の出発のためか京都に游学する。京都にはすでに上野において良忠とともに俳諧を学んでいた北村季吟がおり、その門に入つて、俳諧はもとより古典や和歌を学び、また伊藤坦庵について漢学をも学んだ。貧しい青年時代の芭蕉は「卯辰紀行」の中でも過去を回想して「しばらく身を立む事をねがへども」と記しているように、何とかして身をたてたいと考えていたようだ。この六、七年の京都游学時代の後、一旦は郷里へもどり「貝おほひ」を郷土伊賀上野の天満宮に奉納した。これは季吟の『祇園奉納俳諧連合歌』などの先例にならつて、俳諧師として立つべき決意を神前に披露し、前途の文運を祈願したものであった。さらに志を立てて、二十九歳で江戸へ出るが、これは当時、着々と勃興しつつある新興都市であった江戸に、活路を求めたからだろう。身の置き所として江戸を選んだのは、当時の江戸が上方に比べて政治的にも経済的にも伸びつつある若い都市であり、したがって文化的にも上方に比べて無名の青年の頭角を現わしやすき条件であったからではないかと考えられるのである。

芭蕉が江戸を出てから、俳人としてようやく頭角を現してきたと思われるのは芭蕉三十二歳の頃からであろうか。この年延宝三年

(一六七五)の夏、上方から西山宗因が江戸へ下ってきた。芭蕉は宗因を迎え、俳号を宗房から桃青に改めている。また、有名な「談林十百韻」が成ったのはこの年の春であり、俳壇を談林旋風が席卷するのはこのころからであるから、芭蕉もこのころ貞門俳諧から談林俳諧へ移っていったと考えられる。こうしたことは季吟のもとで京都にいつづけたとしたら、とうていできない飛躍であった。そしてだいに俳諧への傾向が深くなっていったことは事実であろう。

延宝五年(一六七七)、芭蕉三十四歳のころから俳諧の作品が、いろいろの俳書に見られるようになり、俳諧師としての地位がだんだん認められるようになり、俳諧宗匠として独立。これに伴って多くの門人たちを持つようになり、一流の宗匠たちと盛んに歌仙を巻き、延宝八年(一六八〇)四月には「桃青門弟独吟三十歌仙」二巻が刊行されている。芭蕉は豊かな才能をもって、門人たちを巧みに指導し、すぐれた弟子たちがその門から出ることによつて、俳壇における自分の存在を広めていくことになったのであろう。

こうして、東下して俳号を桃青と改め、市中経済、交通の中心であると同時に江戸俳壇の中心地でもあった日本橋に居を占めて、俳諧宗匠として独立し、当時流行の西山宗因流の滑稽に遊んだ芭蕉が、延宝八年(一六八〇)三十七歳の冬、その俳壇の地歩を確立するとともに市中を去つて、隅田川の対岸の新開地深川の草庵にはいつている。これはなぜだろうか。私は、身分社会によつての地位や名譽、そして経済力の影響が大きかったと思う。芭蕉はみずからを「風雅の乞食」と称していた。このことについて尾形功氏は

「しばらく生涯の計」とした俳諧師とは、その黒衣円頂の装いが示しているように、士農工商の四民の枠外の存在である。そ

の生活の資は、すべて門人兼パトロンとしての素人の旦那衆の眷顧に依存している。従つて宗匠としての矜持に欠ける俳諧師の中には、連衆の御機嫌をとり結ぶのに汲々として座敷乞食と蔑まれる者も少なくなかった。芭蕉がみずから「風雅の乞食」と称したのも、一つには、自分では何の生産に寄与するところもなく、衣食のすべてを門人たちの惠与にゆだねた俳諧師としての生活を、顧みての自嘲自戒の気持ちからきている。

(中略)市中を去つて、隅田川の対岸の新開地深川の草庵にはいつたのは、その「風雅の乞食」としての自覚により、徹せんとしたものである。 (後略)

と述べており、「風雅の乞食」としての自覚により、徹せんとした根本には、名譽や経済力といったものが関係してくるように思う。

ここで、これまでの芭蕉の人生をもう一度振り返つてまとめてみることにしよう。まず、伊賀の上野に生まれた芭蕉の家は決して裕福な家ではなかった。幼いころ藤堂良忠に仕え、北村季吟のもとで俳諧を学んだ。その後、藤堂家を去つた芭蕉は郷里を去つて京都へと移る。そして江戸へ出て俳諧宗匠として独立するが、俳諧師という職業につきまとう俗臭をきらつて市中を離れ、まもなく深川の草庵に入り隠者生活が始まった。そしていよいよ旅へと出発することになるが、季吟との出会いによつて俳諧を学びはじめ、これまで俳諧師として人生を歩んできた芭蕉が、突然旅を思い切つたことは、彼の人生において大きな転機であった。今までの生活をすべて捨ててまで、旅へ出ようと決心させたものは何であったか、これが「芭蕉」という人間の姿であつたと思う。

第二節 旅へのあこがれ

芭蕉の書いた紀行文からもうかがえるように、彼は旅の先達者である西行や宗祇といった人々を敬慕していた。このような漂泊の先人に対する敬意、特に西行に対する気持ちというものは絶対的なものがあつた。ここで西行について少しふれておきたいと思う。

西行は戦乱期に生きた歌人で、二十三歳のときに出家して法名を円位といい、西行と号した。若いころから仏道に心を入れ、和歌を愛好しており「身を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ」と世間人になる自分は、実は世を捨てるのではなく、真実な生き方をするのだという出家の際の歌などがあり、七十三歳で没するまで五十年間、仏道修行と歌の道に精進した。三十歳のころ陸奥へ旅をし、その後は高野山に真言宗の僧として修業し、五十歳のとき四国へ渡り、崇徳院の白峰院に詣で、弘法大師出生の地、善通寺の庵にこもる旅をした。六十三歳のとき、源平の戦乱を避けて伊勢国へ移り、戦乱の終わつた六十九歳の秋、ふたたび陸奥へ旅をした。このほか生涯にわたつて修業のための旅行をし、吉野の山にしばしばこもつた。

こうしてみると、西行の人生は芭蕉の人生と似た面を持っているということに気づく。芭蕉が西行のことを敬慕していたのは、たとえば『笈の小文』で春の大和路を歩き、花の吉野へはいつてゐることなどからもうかがえるが、西行の考えが自分の考えに近いものであつたからだと思う。出家の時の歌からもわかるように、西行はみづからの生き方を大切に、生命を愛惜して、自己表現の道を歩い

た。このような生き方が芭蕉にひろく影響・感化を与えたのだらう。

また、漂泊者としてのあり方にも共通性がある。漂泊者といつても、どのような人を漂泊者というのかというと、さまざまな見方があるが、芭蕉や西行の場合は、井本農一氏によると、

(前略) あえて漂泊している、積極的に漂泊している存在こそが、真の漂泊者に値する。(中略) ここでいう漂泊者とは、漂泊することに深い意味を感じ、それを自覚している人間(後略)

とあり、芭蕉は西行を真の漂泊者として見ていたということになる。そこで芭蕉は、自分の理想を西行にあてはめて、自分も西行のようになりたい、西行のような生き方をしたいと思つたに違いない。それで『笈の小文』で「何の木の花とはしらず句哉」「裸にはまだ衣更着の嵐哉」とよみ、『おくのほそ道』で「古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて……」と風雅の道を求めて旅に出て、旅に死んだとあるように、古人の跡を慕つて旅に出ており、芭蕉の生涯と西行の生涯に類似性がみられるのも納得がいくわけで、芭蕉は風雅の先達である西行や宗祇の歩んだ道をもとめ、漂泊の人生へと没頭していつたのであろう。

第二章 芭蕉の旅

前章でも述べたように、芭蕉は俳諧宗匠として独立しながらも、地位や名誉、経済力などの影響から、自らを「風雅の乞食」と称し、

その自覚により、徹しようとして深川の草庵にはいった。しかし、天和三年（一六八二）に草庵は焼失、甲斐に滞留する。芭蕉庵が再建されて、そこに芭蕉がはいったのが天和三年（一六八三）の冬であるが、その時の吟が「あられきくやこの身はもとのふる柏」で、旅心に迫っていたという心境がうかがえる。しかしそれ以前にも旅心の吟はあり、芭蕉の旅への気持ちは前々から芽ばえていたようだ。私は草庵にはいった時点から芭蕉の人生の転機であり、生活が苦しくなるのも覚悟の上で宗匠生活をして、自分の生きるべき道求めていくうちに古人の心を発見し、風雅の旅心がつわっていったのだと思う。そして貞享元年（一六八四）芭蕉四十一歳の年より『野ざらし紀行』の旅に出発し、これが芭蕉の旅らしい旅へのはじまりとなった。以後、『鹿島紀行』『笈の小文』『更科紀行』『おくのほそ道』の旅とつづくが、ここでは作品についてはなく、旅そのものについて見ていきたいと思う。

第一節 『野ざらし紀行』の旅

この旅は、芭蕉四十一歳の貞享元年八月江戸を発ち、翌年四月帰庵するまで、前後九か月に及ぶ上方行脚に取材した最初の紀行作品である。この紀行文の冒頭は、

千里に旅立て、路糧をつままず、三更月下無何に入と云けむ、
むかしの人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江戸の破屋をい
づる程、風の声をよる寒気也。

野ざらしを心に風のしむ身哉

であるが、旅立ちにあたっての旅の目的とは何であったかを考えて

みたい。

第一に、芭蕉は天和三年（一六八三）六月に母親を亡くしており母の墓参のためであったと考えられる。またこれが第一の目的ではなかったという考え方もある。これは「野ざらしを心に風のしむ身哉」という冒頭の句からも明瞭にされているように、亡母墓参というような日常的な目的よりも、「風狂の旅」というような旅そのものを目的とし、風狂に徹しようという態度がみられるという考えである。

しかし、この二つの説にも対立があるようだ。ひとつは「真の文芸探究のためには、わが身を不定住の世界、つまり行脚の世界に身をおかねばならぬ」とするもので、もうひとつは、米谷巖氏、尾形仇氏などがとなえるもので「なんとしてもこの時点において旅に出なくてはならなかった思想的な内因による旅立ちであったとしたり、あるいは死を覚悟して新風探究をこの旅に賭けた、そういう文学上の不退転の内意を表白したものとする論調には、ただちに賛同しがたい（中略）この『野ざらし紀行』の場合でも固有の現実的用途ないし目的が想起される」という前者を否定するものである。どちらの説がよいのかということは、はっきりと断定することはできないと思うが、私なりの考えを述べてみると、芭蕉は俳諧宗匠という生活をして、古人の跡を慕い風雅の旅へ出る決心をしたのだから、旅そのものを目的としており、ある程度は「野ざらし」を心に決めて旅しようと思ったのではないかと思う。私自身このことについて深く研究しているわけではないので、現時点での自分なりの考えにすぎないが、旅の性格や意義について、さらに検討していくとはつきりしてくるのではないだろうか。

では、芭蕉を「野ざらしになっても」という悲壮な決意にさせたのは何であつたらうか。芭蕉庵焼失の時から一所不在こそが人生の本質であると考えていた芭蕉は、その道をたどるために旅へ出る決心をした。そしてそれが本当の人生をたどることになるはずだと……。しかし、いざ出発すると、旅へ出ようとする強い意志の裏では、旅立ちを引きとめようとする心が存在する。だがその思いをふり切つて芭蕉は旅に出るのである。そこで芭蕉は、自分の生きべき道のためなら「野ざらしになっても」という思いを心に抱いていたのだと思うのである。したがつて、その思いがこのような悲壮な決意をさせたのではないだらうか。

このようにして芭蕉は『野ざらし紀行』の旅へと出発した。では、この旅で彼はどんな成果をあげることができたのかを考えてみたい。まず、芭蕉七部集の最初の集である『冬の日』が刊行されることになった。またこの旅を通して各地の俳人や蕉門の人々に、敬畏の念をもって迎えられるようになり、多くの俳句や門人を持つことができた。そして彼自身の人生観や自然観、芸術観などがますます深まつてゆき、自分の道を極めるにあつて、自信をもつことができたに違いない。そうした意味からも、この『野ざらし紀行』の旅が芭蕉にとって、最初の旅として大きな成果をあげることができたことはまちがいないだらう。

第二節 『鹿島紀行』の旅

冒頭に、

らくの貞室、須磨のうらの月見にゆきて、松陰や月は三五夜中

納言といひけむ、狂夫のむかしもなつかしきまゝに、このあきかしまの山の月見んとおもひたつ事あり。

とあるように、貞享四年（一六八七）八月、四十四歳の年に狂夫のあとを慕い、月見の興に遊ぼうと浪人の曾良と禅僧の宗波とを伴いつつての参禅の師で今は隠居している仏頂和尚のいる鹿島を訪ねた旅である。

この旅は短い旅であるが、まずその経路をたどつてみると、貞享四年（一六八七）八月十四日、三人は芭蕉庵門前を舟で出発、六間堀から小名木川を経て行徳に上陸→一行は檜木笠をかぶり八幡里を過ぎて鎌谷の原に至る→行徳からおよそ八里の道を歩いて、その日の夕方利根川のほとりの布佐に到着→宵のほど一軒の漁家で休み、夜舟で利根川を下る→翌十五日、鹿島に到着→雨のため月見ができず、仏頂和尚のもとに一宿→十六日の明け方月見をする→帰路、潮来の本間自準亭に立ち寄る。と江戸を出発してから鹿島に到着するまでがまる一日、鹿島に一日ほど滞在して帰路潮来の自準亭に立ち寄るといふ、月見を目的とした旅であつた。

では、月見を目的とした旅であつたなら、どうして鹿島という地を選んだのだろう。普通月見をしようと思うなら、私なら松島や須磨を思い出すし、ほとんどの人がそうであると思う。しかし、芭蕉があえて鹿島を選んでいるのは、芭蕉が仏頂和尚を敬慕しており、仏頂和尚を訪ねるためであつたと考えられる。このことは、宮田戊子氏が「芭蕉と本間松江に就て」という論文に述べておられるので引用すると、

（前略）この紀行の目的だが、この秋鹿島の月を見んと思ひ立ちと本文にはあるけれども、わざわざ月見に鹿島まで行つたと

は考えられない。又佛頂を訪う處でも、いかにも偶然にそれも思いついて立ち寄つたように書いてあるが、これはどの文にも見える芭蕉の常套手段で、主な目的は佛頂訪問と見なければならず(後略)

とある。芭蕉が仏頂和尚を敬慕していたということは、旅の伴として禅僧の宗波をつれていったことからもうかがえるし、現在一般に『鹿島紀行』という名で呼ばれているこの旅が、実は『鹿島詣』であつたということを知るとはつきりしてくる。

このように、鹿島への旅の目的は仏頂和尚を訪ねることであつたにもかかわらず、月見のために旅をしている点がいかに芭蕉らしい記述であると思う。またこの旅では道中で自然や月見の趣にふれて、ますます「風狂」というものを深めることができたのではないかと思われれる。

第三節 『笈の小文』の旅

貞享四年(一六八七)十月二十五日この旅に出た。この紀行文の中で芭蕉自身が「ゆへある人の首途するにも似たりと、いと物めかしく覚えられけれ」と書いているように、このころ芭蕉は江戸においてかなり声望が高かつたということが分かる。そして出発にあつたの壮行は盛大なものであつた。

さて、芭蕉の旅立ちの動機はというと自然によって招き出されるといった具合であるが、この『笈の小文』の旅においても

神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して
旅人と我名よばれん初しぐれ

又山茶花を宿くにして

と旅立ちの動機が自然によって招き出される風流心ゆえであるとしているが、本当の旅の目的は吉野の桜を見ることにあつたように思う。旅立ちの興にも「時は冬よしのをこめん旅のつと」の発句を餞別としていただいたとあるが、芭蕉の心にも「吉野の桜見」の思いが強かつたと思う。それはやはり西行への敬慕からくるものである。吉野といえは桜の名所として有名だが、西行も吉野において桜のうたを多く残している。桜のうたといえは西行が晩年に詠んだ「願はくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月のころ」という歌を思い出す。自然を愛好した西行にとっては桜の花はもつとも心を寄せたものであつた。そんな西行に思いをよせている芭蕉にとっては、吉野に旅することははや宿命的であつたかもしれない。吉野において芭蕉は三句、桜の句を詠んでいる。しかし吉野の花に一句と旅の着想として考えていたができなかつたとあるのは、単に桜ではなく、「吉野の桜」としての句ができなかつたということであろう。しかし芭蕉は、有明の月のもののははれる趣にひたたり、撰政公の歌により眼前の美景に心の奪われるほど酔いしれたり、また西行の「こぞの技折の道かえてまだ見ぬ方の花をたづねん」の歌のとおり、更にこの美景の奥深くに迷い込みたい気持ちになつたりと心は非常に充実していたようにみうけられる。

またこの旅は、蕉風拡張に大きな役割りを果たした旅だといわれている。このことは、名古屋、熱田、伊勢、伊賀などで色々な人たちに歓迎されたりしている点からも指摘されるが、この旅は『野ざらし紀行』の旅以上に吟会が多く、芭蕉は多くの門人たちを得て、のびのびとした旅を続けて風雅に遊び、『野ざらし紀行』の「野ざ

らしを心に風のしむ身哉」の悲壯感はない。そうした面ではこの『笈の小文』の旅は芭蕉にとっては楽しい旅であったということが出来るだろう。

第四節 『更科紀行』の旅

貞享五年（一六八八）八月十一日、芭蕉はこの旅に出発した。この更科への旅はどのように決定したのであろうか。

同年の三月、芭蕉は杜国をつれて吉野の花見の旅に出た。五月初めごろまでには江戸へ帰ろうという予定であったが、だんだんとおびていった。四月二十三日に京に入り、翌二十四日、杜国は伊賀上野の惣七宛に「猶此す多はおぼすて・さらしな・むさし野・富士までも安く見めぐり候様にとこのばかり御座候」と書いており、足をのばして更科の月の名所娵捨までも訪ねようという気になっていたことがうかがえる。だが、まだこの時点で、八月十五日に更科に行こうと考えていたかどうかは明らかではない。芭蕉とともに、江戸に帰るまで共にしようと思っていた杜国ではあったが、何らかの都合によりそれを断念。芭蕉は五月の末に大津に在り、次の前書とともに句を残している。

木曾路のたびをおもひ立て、大津にとどまる此、先せたの蜚を
見に出て

此ほたる田ごとの月とくらべみん 翁

これによって芭蕉が月のころ更科へ旅しようと考えていたことがわかる。これは村松氏の論を参考にして、表面的な筆実のみを追って見たものである。しかしこれだけで更科の旅へ出るまでの芭蕉の心

情をもくみとることはできない。芭蕉はどういう気持ちで旅に出たのであろうか。『笈の小文』の旅の終わりごろから芭蕉は自己の詩人的活動の停滞を秘かに自覚しはじめたか。門人のいない地方を歩き、自己の俳風の更に新たな飛躍を考え出したのではないか。岐阜から更科へ月見を志したのは、その第一歩であろう」という井本農一氏の説がある。この説には私も賛成である。または、芭蕉が人生を旅で生きようと決心してはじめた旅であるから「自己の俳風の更に新たな飛躍」の他にも、何か違った気持ちを抱いていたかもしれない。

さらしなの里、おぼすて山の月見ん事、しきりにすゝむる秋風の心に吹きはぎて、ともに風雲の情をくるはすもの、又ひとり越人と云。木曾路は山深く道さがしく、旅寐の力も心もとなしと、荷分子が奴僕をしておくらす。

と冒頭にあるように、この更科の旅は、きびしい山路の風狂の旅であった。

俳や姥ひとりなく月の友

身にしみて大根からし秋の風

ひよろく／＼と尚露けしやをみなへし

など、旅ではきびしい自然に接した思いや悲哀感がただよっている。こうした思いが、更科紀行のひとつのテーマであっただろう。

また、

元日は田毎の日こそ恋しけれ

とよんでいることから、更科の旅を終えてもこの思いは芭蕉の心の中に残っていたことがうかがえる。この時、芭蕉は旅においても、この「悲哀感」により成長したのではないかと思う。これがみちの

くの旅へとむかう彼の心持ちとなり、ますます旅へとかりたてていたのだから。

第五節 『おくのほそ道』の旅

『おくのほそ道』は、元禄二年（一六八九）芭蕉四十六歳の春から秋にかけて行われた奥羽・北陸地方への、日数百五十七日旅程六百里に及ぶ旅である。

『おくのほそ道』の冒頭の部分を見ると、

（前略）予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて（中略）

春立てる霞の空に白川の関こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず（中略）ことし元禄二とせにや、奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひたちて（後略）

など、いかにもこの旅が気まぐれに企てられたように受け取れるが、決してそうではなかった。『おくのほそ道』旅行の前々年から前年にかけて行われた『笈の小文』の旅では多くの門人ができ、各地に芭蕉の来遊を待ち受ける風流人がいて、俳席の数は多く、しょせん新しい宗匠生活である。芭蕉が『笈の小文』の旅の終わりに、美濃の国あたりから知人・門人のいない信州の更科の月見を志したのは、新宗匠生活から脱け出したい気持ちがあったからではないだろうか。この旅を試みたのち、江戸へもどって元禄二年（一六八九）を迎えると、早くも奥羽・北陸への大旅行、いわゆる『おくのほそ道』の旅を計画している。一年近くも江戸を留守にして長い旅から帰ったばかりなのに、どうしてすぐに旅に出ようと考えたので

あろうか。また門人や知人の少ない奥羽・北陸の行脚を志したのはなぜだろうか。芭蕉がどんな気持ちでこの旅に出たのか、考えてみたい。

今まで述べてきたように、芭蕉がこの旅に出たのは元禄二年、四十六歳の春で、その前年の八月に関西からの長い旅行から帰ったばかりである。貞享五年（一六八八）八月二十日ごろ江戸に戻ってきた芭蕉を、江戸の人々は歓迎して、次から次へと訪問客が絶えなかった。「毎日／＼客もあつかひ」「元禄二年正月十七日付、半左衛門宛書簡」と芭蕉自身も書いており、俳諧の会合も多かった。しかしその中で芭蕉は誰にも言えない物思いや、文学上の悩みがあったようだ。元禄二年閏正月頃の猿雖宛と推定される書簡に「去年の秋より心にかゝりておもふ事のみ多ゆへ、却而御無きたに成行候」と書いている通りである。そこで芭蕉は自己の俳諧の停滞に気づき、新しい展開の方途を考えた。いかにして新たな展開をはかるか、それを『おくのほそ道』の旅に求めたのだ。そのために、今までの旅とは違う『更科紀行』の旅で経験したような門人・知人の少ない辺鄙な土地を歩いてみようと思ったのだから。

よつて、この旅はもちろん楽しい観光旅行ではなく、物思いを秘めた旅である。まして今までのように門人の間を泊まり歩くわけはないのだから、乞食の境涯になることを覚悟したきびしい旅である。だから芭蕉は深川の芭蕉庵を売って旅費にあてた。芭蕉にはこのようにしてまでも旅に出なければいけないわけがあった。現実的なことを捨てて一切を芸術に献身しよう、新しい詩的飛躍を計ろうという決意である。冒頭の部分から見る限り、一見この旅が気まぐれによって企てられ、呑気に名所見物をして歩く旅かのように思

われるが、実は出発に際しては、芭蕉の強い決意と意志があったということを知ることができる。

では、なぜ関西の長旅から帰ってすぐの元禄二年の春に、この旅に出発したのだろうか。この問題も「いづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思いやまず」ではかたづけられないであろう。よく言われている説に、西行に関わるものがある。芭蕉が西行のことを大変敬慕していたということは知っての通りであるが、ちょうど元禄二年には西行五百歳忌だから、その記念に『おくのほそ道』の旅に出たという説である。阿部正美氏の意見を参考にしてみると

● 中西啓氏はこの年忌について、元禄二年正当説をとる名古屋蕉門と、元禄十年正当説をとる江戸蕉門との確執に悩まされた芭蕉が、元禄二年奥羽行脚に出て西行の遺跡を訪ね、その成果を元禄十年に刊行して両方の顔を立てるつもりではなかったかという。

● 山本唯一氏はほぼ同趣旨を述べて、この旅は平泉・象潟・色の浜の如き西行由縁の地を拠点とした芭蕉の西行記念行事であったとした。

● これにより、たとえば「細道」の旅立ちの条に、曾良本で最初へ此たび奥羽長途の行脚とあった「此たび」を後にへことし元禄二とせにやと改めた意図もはつきりする。

● 同じく曾良本で平泉光堂の句の初案がへ五月雨や年／＼降て五百たびと／＼となっているのも、西行五百歳忌を踏まえた発想であることがわかってくる。

● 「細道」で西行に関係のある記事は随所に見られるのだから、芭蕉の奥羽旅行と元禄二年という年が西行遠忌を媒体として結

びつくことは決定的といえよう。

と、このように述べられており、このことから芭蕉が『おくのほそ道』の旅を元禄二年に出発したということはいえると思う。しかし芭蕉自身がこのことについて述べたという形跡がひとつもないし、「西行に関係のある記事は随所に見られる」といっても『おくのほそ道』の本文に頻繁に出てくるわけではなく、二、三か所くらいであるという事実から考えると、私は単に元禄二年が西行五百歳忌だから、その記念に旅に出たということだけではないような気がする。芭蕉は自己の俳諧の停滞に気づき、新しい展開を旅に求めているのだから、西行のためであるとかいうよりも、自己の文学の行きづまりを打破しようという思いを強く胸に抱いていて、芭蕉は自身のため旅に出たのだと思う。

この旅で芭蕉がまず志したことは、日本の文学伝統の中に身をゆだねることであった。それで奥羽地方の歌枕・名所・旧跡を丹念に探訪している。そしてこの歌枕・名所・旧跡が旅の前半において集中的・精力的に行われていることに注目したい。もともと歌枕・名所・旧跡を探ることは、文人の旅の最も普通な形で、中世以来の日本の文人・隠者の旅の基本的な形式であったから、芭蕉もその型に従ったのであるが、陸奥に歌枕・名所・旧跡が多いにしても、芭蕉の探訪の仕方は異常なまでに丹念である。それも私たちからすればあまり興味のもそそらないつまらないものが多い。例えば、浅香山は今見れば何ということはない道はたの小山だし、壺碑は今見れば何ということもない古い石碑で、しかも後年の偽造である。その他、最上川、文字摺石、武隈の松など数えればきりが無い。だが浅香山は『万葉集』以来多くの歌がよみ続けられている懐しい山である

し、最上川も『古今集』以来よみ続けられている歌枕である。武隈の松や文字摺石にも味わい深い伝統がある。また壺碑では「眼前に古人の心をはっきりと確かめる思いがして……涙もあふれるばかりであった」と芭蕉は残している。古人たちは街道の途中の歌枕・名所・旧跡を訪れたり、眺望したりする程度が多く、芭蕉のように丁寧な探訪は少ない。芭蕉はこの探訪により、伝統に素直に随順している。ただ古人の旅のように訪ねるのではなく、歌枕・名所・旧跡は古人の育てた文化遺産であり日本文学の伝統のこめられたものであるから、優れた先人たちの生んだものにまづ素直に心を傾けてみようと考えたのだろう。芭蕉が探訪したところは歌の世界があり、伝統が長く言い伝えられているところであるから、その世界に心をゆだねようとしている。そして、そこに人間と自然のつながりを見た。「みちのくの山河草木は、人間と共に泣き、笑い、悲しみ、喜んで今日に至っている。芭蕉はその歴史的・伝統の中に、自分を投げ出し、自分を全身的に浸らせようとした。自然は人間と対立するものではなく、人間と共にあるもので、人間それ自体も自然なのだ。それが芭蕉の自然観である」(芭蕉 旅ごころ「奥の細道」の旅より)。芭蕉にとってみちのくを見ることは、みちのくの文学伝統を見ることであり、その旅に徹することは、伝統に埋没することだったのだろう。このように芭蕉がこのような歌枕・名所・旧跡を飽きもせず訪ね歩き、文学伝統に傾倒したのは、すでに述べてきているように、日本の文学伝統の中に自分を浸らせ、それにより自己の文学の新しい展開を求めていたからである。

その結果として、芭蕉は何を得ることができたのだろうか。「不易流行」という文学理論である。芭蕉は直接にはこの言葉を文章中

に使ってはいないが、はじめて不易流行論を説いたのは、元禄二年、この『おくのほそ道』旅行中だとされている。そのことは蕉門の去来が「故翁奥羽の行脚より都へ越えたまひける、当門の俳諧すでに一変す」(『贈晋氏其角書』)と言、「この年(元禄二年)の冬、はじめて不易流行の教を説き給へり」(『去来抄』)と述べていることによってすでに定説化している。さらにいえば『おくのほそ道』旅行中の芭蕉から俳諧の教を受けた羽黒山下手向の呂丸が書いた『聞書七目草』には「風俗流行の俳諧」とか「世下の流行によくながれわたり」などの不易流行論を思わせる説明があるところを見ると、芭蕉が羽黒山に十日ばかり滞在している間に、呂丸というこの土地の熱心な俳人に、そのことをはじめて語ったと思われる。なぜ「不易流行」という論を読いたのか。芭蕉はこの旅の前半において、丁寧な歌枕・名所・旧跡の探訪をしてきた。その中で人工的なものに移ろいやすいことを痛感している。そのことが、この不易流行ということを考えるきっかけのひとつになったのであろう。

では、不易流行論が説かれるにあたっての根源は何であったろうか。これは研究者の人たちも指摘されているように『聞書七目草』による「変化を以てこのみちの花」や『山中問答』による「妙句の古きよりは、あしき句の新しきを俳諧の第一とす」などにみえる変化や新しみの追究であろう。しかし変化であればどんな変化でもよい、新しければ何でもよいというものではない。『笈の小文』の中に「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり」という有名な一節があるが、芸術の中には時代を通して変わらない「或る物」と、時代によって変わって行く「或る物」とがある。だから時代を越えて

一貫するものをつかむとともに、その中から変化や新しみを追究しなければならぬであろう。

こうして芭蕉は歌枕・名所・旧跡を探訪して、自己の文学の新しい展開を求め、伝統の中に身をゆだね、そして得たこの考え方によって、その後の俳諧を大きく変え、さらに飛躍させることができた。よつて『おくのほそ道』の旅が、芭蕉にとっていかに大きな意義をもつものであったかがわかるであろう。

八月二十日すぎに大垣に着いて『おくのほそ道』の旅は終わったが、これで芭蕉の旅が終わったわけではない。元禄四年（一六九一）四十八歳、十一月初旬江戸へもどるあいだの約二年あまり、関西各地に漂泊の生活を続けた。そして元禄七年（一六九四）五月、芭蕉はまたも関西への旅に出た。最後の旅である。芭蕉はこの年の十月十二日をもって病没するが、こうして常に何かを求め続けていった芭蕉の旅を見ると、芭蕉は「永遠の旅人」であったということができるであろう。

第三章 芭蕉にとって旅とは何であったか

芭蕉は古人の跡を慕い旅に出たといわれているが、旅に出る決心をさせたものは、天和二年（一六八二）末の芭蕉庵類焼であったと思う。この芭蕉庵類焼により、一所不住の心を抱き、それこそが人生の本質があると思ひ、その道をたどらなければならないと決心したのではないだろうか。

芭蕉の芭蕉らしい旅のはじまりは『野ざらし紀行』の旅からであ

った。この旅に出発し、最後の関西への旅に向かい没するまで、芭蕉は約十年あまりを旅で暮らしていたことになる。この旅の中で、芭蕉の本当の漂泊の旅だといわれるのは『おくのほそ道』の旅からであろう。芭蕉は自己の俳諧の停滞に気づき、新しい展開の方途を考えて、門人・知人のいない辺鄙な土地を歩いてみようと思った。そして日本の文学伝統の中に身をゆだねることを志し、丹念に歌枕・名所・旧跡を探訪して、その結果不易流行という文学理論をうちたてた。この経験が、以後の芭蕉の俳諧を大きく変えて、飛躍させることになったのだから『おくのほそ道』の旅がいかに意義のあるものであったかは言うまでもない。

普通私たちの旅といえ、いわゆる観光であり娯楽である。しかし芭蕉は人生のうちの十年以上を旅で過ごしており、それはもはや非日常的な生活であつて、私たちのようなただの観光・娯楽といつた旅ではない。その旅の中で常に何か新しいものを求めていたように思う。その追求は決してとどまることはなかった。したがつて芭蕉の旅は、大きな成果をあげることができたといわれる『おくのほそ道』にとどまらず、その後も旅を続け、旅で没した。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

この句を最後とした芭蕉の終焉には大変あわれ深いものを感じる。

このように、たえず新しみを追究し、これでよいという限界がない世界に身を置き続けた芭蕉は、まさに「永遠の旅人」であつたといえるだろう。こうしてみると、芭蕉にとつては人生そのものがすでに旅であつて、芭蕉は旅の中で生き続けていたように思われる。

『おわりに』

私は『おくのほそ道』を通じて芭蕉の旅に興味をもち、この研究では自分なりに芭蕉を理解し論じたつもりであるが、資料や文献を読むうちにいくつか混乱が生じ、自分の気持ちやうまく表現できなかった点があるのが残念である。まだ不十分でまとまりのない文章になってしまい、もっと早くから取りかかればよかったです。少し後悔しているが、旅の性質や旅に対する思いを学んで、芭蕉という人間を知ることができたことを嬉しく思う。そして彼の旅に生きる姿に非常に感動した。毎日平凡な生活を送っている私に、これから人生を歩んでいくうえで、彼の生き方や考え方など、この研究で得たものが何かのプラスになればと思う。

芭蕉が亡くなってから三百年がたつが、彼は今でも私たちの心の中にいる。今回の研究は芭蕉についてはほんの一部分しか触れていないので、今後もさまざまな角度から芭蕉を見て研究を深めていきたいと思う。

参考文献

『芭蕉講座』第五卷 俳文・紀行文・日記の鑑賞 有精堂

『芭蕉 旅ころ』井本農一 読売選書

『芭蕉』日本古典鑑賞講座 第十八巻 角川書店

『芭蕉Ⅰ』日本文学研究資料叢書 有精堂

『芭蕉Ⅱ』日本文学研究資料叢書 有精堂

評

よく頑張りとおしました。

『おわりに』の中で、「芭蕉は今でも私たちの心の中にいる」と書いているのは、いかに貴女が、この卒論に真剣に取り組んだかがよくわかります。

芭蕉の「旅にでるやむにやまれぬもの」は終末部の『おくのほそ道』の記述でよく肉迫し感得していると思います。

「みちのくの旅」を歩みながら誠実に伝統へ随順し、また素朴に自然に融合して、己の停滞した俳境の脱皮・克服を心がけ、新しい詩魂の開眼と飛翔をはかろうと苦難の旅をつづける芭蕉、その苦難の中に胚胎した不易流行の理念こそ、人生を旅と観する芭蕉ならばこそという論及は、しかとうなづけるものがあります。

(片山敏之)